Voice of friends

2019Annual Report

年次報告書

FRIENDS
WITHOUT A BORDER

© Keibun Miyamoto

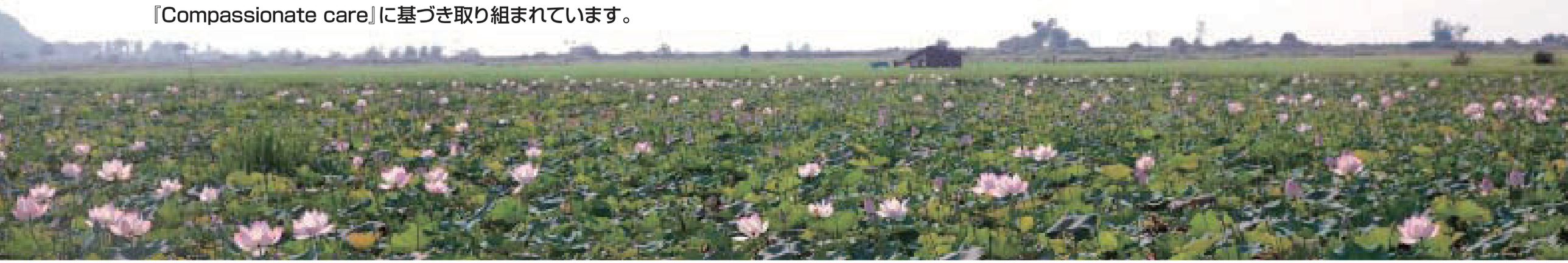
Compassionate care

すべてのことに思いやりの心を持って対応すること
どんな患者さんにも我が子を思うのと同じように接すること

これが私たちの信条です。

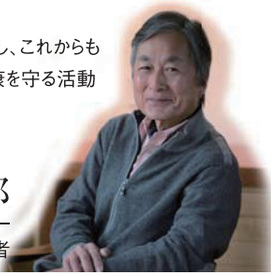
当団体に関わるすべての活動は
『Compassionate care』に基づき取り組まれています。

私たちが築く病院は、医療を提供するとともに、教育病院としての機能を持ちます。現地雇用したスタッフを教育し、自分たちの手で質の高い心のこもった医療を提供できるまでに育成すること。また、院外医療従事者に対しても教育の場を設け、国全体の医療水準向上に貢献します。
東南アジア地域での特徴は、保健教育が浸透していないがゆえに病気を引き起こす例が多いことです。そのため、院内での医療活動のほかに、院外での病気予防活動にも力を注いでいます。



“国境なき友人たち”支援者の皆様へ

Compassionate care（思いやりあるケア）を基本理念としてアンコール小児病院とラオ・フレンズ小児病院を通じて、アジアの子供たちの健康を守ることがフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーの願いです。
2015年に開院したラオ・フレンズ小児病院の2019年度は、3年近く院長として務めたサイモン院長の引退と新規に採用されたマーク・ゴーマン氏の院長交代で始まりました。ゴーマン氏は医師ではありませんが、ラオスでの在住歴が長くラオス語と文化を理解し、医療団体で総務の仕事や政府との折衝役を歴任してきた経歴が評価され、かねてより必要とされていたラオ・フレンズ小児病院の今後5年間の事業プラン制作とラオス政府・保健省との連携強化に適任とされ採用されました。
今年の嬉しいニュースは3年前に首都ビエンチャンの、競争率の大変高い小児科医療研修プログラムにラオ・フレンズ小児病院の医師が採用され、3年間の研修を終え、見事に最初の認定小児科医師として戻った医師2名、そして今年第2弾として新たに同プログラムに採用されてビエンチャンへ3年間赴任する2名の医師。彼ら、彼女らは当院での活躍のみならず将来のラオスの小児科医療を背負う大きな戦力となることでしょう。
また2年前に新設された新生児病棟は連日奮闘するラオス人スタッフと海外ボランティアスタッフのおかげで毎日20人以上の小さな生命が守られています。この新生児病棟ができる前は、隣接する県立病院で産まれた未熟児や疾患を持った新生児は手当を受けることができずに家に帰されていたことを思い出すと感無量です。開院から5年も経つといろいろな問題に遭遇してもそれらを乗り越える実力がつき、運営も自ら安定してくるのはスタッフ一同の努力の賜物と感謝しています。
ラオ・フレンズ小児病院ではすべてのスタッフが患者をあたかも我が子のように親身にしかも無料で診療しています。貧困家庭が非常に多いラオスではラオ・フレンズ小児病院は彼ら、彼女らにとっての大切な拠り所なのです。これも支援者の皆様なしでは実現できません。
改めて皆様に感謝の気持ちをお伝えし、これからも私たちと共にアジアの子供たちの健康を守る活動のご支援をお願いいたします。



井津建郎
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー
創設者

年々増加するラオ・フレンズ小児病院（LFHC）来院患者数ですが、2019年夏にはデング熱と日本脳炎が流行して一段と増加しました。特に入院病棟では、廊下や空きスペースに常時ベッドを置いて対応する状況となりました。また、とても難しい複雑な症例も増え、患者さん1人に費やす時間も長くなり、限られた時間の中で質の高いケアを持続させることの難しさに頭を抱えるスタッフの姿がありました。これが学びの瞬間なのだろうなと思います。
最近は、ビエンチャンの専門医へ転送が必要な症例が増えてきました。しかし、LFHC外での治療には医療費がかかります。その医療費支払いが可能かどうかで、病気の経過が大きく変わってしまいます。たとえば白血病のAちゃんとBちゃん。別々の家族でしたが、同じような年齢の子2人がほぼ同じ時期に白血病の診断を受けました。Aちゃん家族は経済的に余裕のある家庭で、ビエンチャンの専門医へ抗ガン治療を受けに行きました。しかし、Bちゃんの家族は、治療にかかる費用を聞いた段階で、「どうやっても捻出できる金額ではありません」と言って村へ帰っていきました。抗ガン治療には多額の医療費がかかります。ビエンチャンの病院へ行く交通費だけでも大きな負担になりますから、村から首都の病院へ行く、というのは簡単なことではないのです。
こんな時、どうにかならないものかと、もやもやが残ります。やりたいこととできることは別であるということを念頭において日々業務にあたっていながらも、やはり葛藤を抑えることはできません。
こうした葛藤と戦いながらも、自分たちがしてきたことは間違っていないのだという確信を持てることがあります。それは、とても重症だった患者さんが、かわいい笑顔を見せられるまでに回復した時です。最近こうした『ミラクルちゃん』が増えている気がします。以前ならば命を守ることができなかっただろうと思われる患者さんが、LFHCの医療がより充実したことによって助けることができたのではないかと思うのです。そうした『ミラクルちゃん』がどんどん増えて欲しいなと思います。
あらためて、フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーの目指すゴールが近づいていることを実感する1年となりました。
引き続き日々の向上心と初心を忘れずに前進してまいりたいと思いますので、今後もフレンズの活動をご支援いただけますよう、よろしくお願いいたします。

赤尾和美
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
代　表

乳幼児から15歳までの子供たちを対象に、24時間態勢の救急病院として診療をおこなっています。

医療

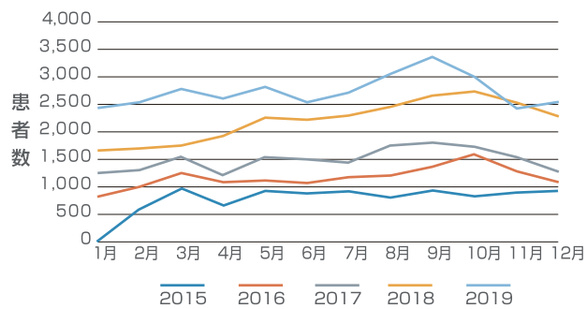
ラオス

2015年の開院から4年。ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）の患者数が、のべ10万人を突破しました。前年と比べると、外来患者数13%増、入院患者数25%増、新生児患者数40%増、救急患者数76%増と、軒並み増加しています。地域の認知度や信頼度が高まった結果といえましょう。これまで医療に馴染みのなかった人たちが、医療との距離を縮め、少しでも身近に感じてくれるようになったのなら、それも私たちの活動の成果だと思っています。一方、患者数が増えたことに比例し、難しい症例に出会うことも多くなりました。原因が特定できず、入院期間が延びるケースの急増です。これらに対応するため、医療スタッフの育成や他病院との連携など、視野を広げて医療に取り組む必要性を、より強く実感した1年となりました。

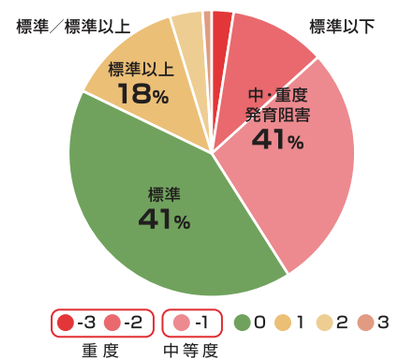
- 医師と看護師が実施した診療件数は39,944件でした。前年比27.6%増です。
- サラセミアクリニックは患者数が303名になり、十分なサービスを提供するために規模を拡張しました。
- 障がい児クリニックの患者数は354名になりました。
- 検査実績数は10,128件でした。前年比37.7%増です。
- サーバーを介してX線等の診断画像を保存する、新しい管理システムを導入しました。すでに数千人分の患者さんのファイルを保存。このシステムが導入されたことで、より効率的かつ効果的に医療を提供できるようになりました。
- これまでの電子カルテを改良し、新しい電子カルテを導入しました。新システムにより、臨床、放射線、薬局および検査科の情報を統合。表示もわかりやすくなり、診断を速め、医療ミスを減らすことにつながっています。このシステムは、ラオス全土の病院やクリニックのモデルとなりました。
- サラセミアの患者さんの、初めての脾臓摘出手術が行われました。術後の経過は順調で、患者さんは学校に通うことができるまでに回復しています。
- 予防医療部長の役職を置くための準備に取りかかりました。予防医療部長の役割のひとつには、他NPO団体との協力も織り込まれています。
- 4名の看護師が、看護部を率いるリーダー的な役割を担うまでに成長しました。
- 研修を終えた3名の看護師が、新たに麻酔専門看護師に認定されました。
- 外国からの駐在ボランティアとして、医師50名、看護師39名、放射線技師5名、チャイルドライフセラピスト（遊びを通じて治療に関わる専門家）3名、薬剤師2名、その他の専門家9名が医療活動に関わってくださいました。

外来患者総数：24,878人（13%増）
入院患者数：2,891人（25.1%増）
新生児患者数：680人（40%増）
救急患者数：11,801人（76.7%増）
手術件数：1,213人（57%増）

ラオ・フレンズ小児病院　来院患者統計



身長に対する標準体重（Z-スコア）



医 療

ラオス

TREATMENT

新生児病棟

新生児病棟は昨年、手狭になったために増床し、20床で対応しています。ところが、現在でもほぼ満床状態であることが多く、常時フル稼働状態です。新生児の患者さんが多い、ということは、産婦人科での対応も関わるということ。

LFHCは小児病院ですので産婦人科はありませんが、隣接した県立病院には産婦人科があり、連携を取りながら新生児医療に取り組んできました。LFHCの看護師が分娩に立ち会ったり、分娩室とLFHCとで電話連絡できるようにしたり、両者で話し合いを重ね、うまい連携の取り方を常に模索し続けています。その一環として、産婦人科スタッフを対象に、新生児救急蘇生トレーニングを実施しました。新生児の死亡率は適切な蘇生によって下げることが可能なため、これはとても重要なスキルです。蘇生の知識や技術を習得すれば、1秒でも早く蘇生に取りかかることができます。

実際、トレーニングを行ってみると、経験の長い医師や看護師から「新しい知識や技術だった」との反応があり、今後の新生児医療にプラスになるのではないかと期待しています。

専門外来 サラセミアクリニック

遺伝性血液疾患であるサラセミアは、ラオス北部で非常に多く見られる病気です。一生、輸血が必要となるばかりか、膨大な数の不完全な赤血球を脾臓で処理するため、脾臓の負担が増して大きく腫れた状態に陥ります。LFHCでは2017年にサラセミアの専門クリニックをオープンしましたが、患者数は増え続け、2019年までに登録されている患者さんは303名になりました。しかし、これらの患者さんが全て継続して通院を続けるかというと、そうとも限りません。通院や治療の経費が負担になり、あきらめてしまうケースもあるからです。

増える患者さんと、あきらめる患者さん、これらの状況を改善すべく、地域の医療施設での対応を開始しました。LFHCまで通院するのが大変な患者さんを、地域で受け入れてもらおうという試みです。LFHCと同じクオリティで対応してもらうため、まずは、スタッフへのトレーニングを行わなければなりません。第1号に選んだのは、サラセミア患者さんが多いナンバック郡。LFHCから車で2時間程の地域です。さっそく、ナンバック郡病院の医師と看護師にトレーニングを受講してもらいました。今後、お互いにコミュニケーションを取りながら、患者さんを支えていく予定です。

専門外来 障がい児クリニック

以前は、障がいを待つ子供を持った家族は、そもそも障がいがあることに気づいていなかったり、あるいは気づいていても意識的に目をそむけたり、というケースが多く見受けられました。2017年の障がい児クリニックオープン以降は、自ら「障がいがあるようなので診てほしい」と来院する患者さんが増えています。患者数は354名になり、改めて需要の高さを実感する1年となりました。

障がいは、多くの場合、完治させることはできません。福祉システムが充実していないラオスでは、家族が障がいのケア全般を担わなければならず、その負担は想像以上に重いと思われます。このクリニックでは、患者さんを診療するだけではなく、家族のサポートをするのも大きな役割です。患者さん同士、その家族同士のふれあいの場を提供し、悩みや情報をシェアすることで、ストレスを軽減させることができます。

クリニックスタッフの専門性を向上させるため、スタッフ教育にも力を注ぎました。外部から専門家を招聘し、質の高い医療を提供できるように取り組んでいます。

検 査 科

新しい検査機器を導入したことで、LFHC内部でできる検査の幅が広がりました。1年間の検査件数は10,128件で、前年比38%増。この急増に伴い、検査科は週末の業務時間を延長して対応しています。特に、デング熱が全国的に流行した8〜10月は特に慌ただしい日々が続き、この間だけで3,700件以上の検査を行いました。

ラオス国立検査協会への入会に向けて、手続きも開始しています。

薬 局

患者数の増加とともに、薬局業務も忙しさが加速。1年間の処方箋数は54,623件で、前年比12.7%増です。しかし、新しい電子カルテシステムが導入されたことで、医療現場と薬局の連携はよりスムーズになりました。

近年のWHO調査報告で「医療施設で必要な医薬品入手が困難」とされたラオス北部で、LFHCでは子供たちに必要な医薬品が提供できています。

院内スタッフはもちろん、国内の医療従事者にも研修やトレーニングを実施し、国全体の医療レベル向上に貢献しています。

EDUCATION

教育

ラオス

ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）の大きな役割のひとつに、医療教育があります。単に医療を提供するにとどまらず、現地の医療スタッフを教育し、育てることが大切だと考えているからです。それはLFHCのスタッフに限ったことではありません。ラオス国内の医療従事者全般を対象とし、ラオス全体の医療水準向上を目指しています。

院内の大きなトピックとしてあげられるのは、独自の小児科医育成プログラムの導入です。これは、1年間のチャイルド・ヘルス・ファウンデーションコースから始まり、その後、小児科専門医認定証を受けるまでの3年間のプログラムとなっています。綿密なカリキュラムにより、小児科医として不可欠な基礎知識を提供し、子供の立場に立った、倫理的かつ質の高い安全な小児医療を身につけるために作成されました。

院外では、他病院の医師と看護師への研修、保健センターの看護師と医療アシスタントへの研修などを実施。より積極的に、地域への教育を広げています。

- 院内感染を予防するための、実践を交えたトレーニングが行われました。
- チアミン欠乏症（ビタミンB1欠乏症）の長期リサーチプロジェクトが開始されました。これは、ラオスが、国レベルで栄養に関する医療体制を整備するために取り組み始めたプロジェクトです。
- 3名の看護師が3年間の専門研修を終えて、麻酔科専門看護師として認定証を授与されました。
- LFHCスタッフの英語試験上位者を表彰しました。院内スタッフは英語教育が必修となっており、常時、レベル別の英語教育が提供されています。
- 理学療法士が、脳性麻痺の患者さんに対するケアについて講義を行いました。合わせて、身体のポジショニング、運動、食事の食べさせ方などを実習しました。
- サラセミアの患者さんに対する適切なケアと治療について、ナンバック郡病院の医師と看護師にトレーニングを実施しました。
- 隣接するルアンパバーン県立病院の産婦人科スタッフを対象に、LFHCスタッフによる新生児救急蘇生トレーニングを実施しました。
- ルアンパバーン県フォンクセイ郡の保健センターで、看護師と医療アシスタント10名に対し、『正しい診断と治療』について2週間のトレーニングを実施しました。

【ラオス北部地域における小児栄養失調に対するケアの改善プロジェクト】

2018年に公益財団法人日本国際協力財団の「国際協力NPO助成」に採択され開始したこのプロジェクトは、栄養失調に対するケアの質を向上させることを目標としています。2019年も同財団からの助成が決定し、継続してプロジェクトが実施されました。2018年から2019年にかけて、LFHCのラオス人栄養士と看護師、および医師に対して、栄養に関する専門的な研修を実施した結果、適切な測定が徹底され、正確に栄養状態を評価できるようになりました。2019年の下半期は教育範囲を広げ、研修を受けたLFHCの栄養士が指導者となって、メディカルアシスタントの学生や保健センターのスタッフへ栄養教育を行いました。2020年からラオス政府も栄養プロジェクトを開始する予定で、ラオス保健省と協力して、ラオスの栄養失調問題に取り組んでいきます。

保健・衛生観念が浸透していない農村部に出向いて病気予防を指導するとともに、経過観察が必要な慢性疾患患者を継続的にケアしています。

予防 OUTREACH

ラオス

アウトリーチプログラムの主な活動は、院内にいる患者さんがスムーズに退院できるようサポートし、退院後も健やかに過ごせるようなフォローアップを行うことです。

2019年のアウトリーチ訪問の特徴は、『単発の訪問』が増えたことです。基本的には、慢性的な疾患を持った患者さんなどに対して、繰り返し家庭でのフォローアップをしながら経過観察することが目的となりますが、時には1度だけの訪問が大きな意味を持つケースがあることを認識しました。たとえば、病院でのフォローアップが様々な理由によりできなくなったままの患者さんや、死亡した症例などがそれに当たります。

死亡症例のフォローアップは、患者さん家族のみならず、ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）で働くスタッフに対しても重要であることがわかりました。

患者さんのご家族は、愛する子供が目の前で亡くなるというとてもストレスフルな状況下では、頭は真っ白です。悲しみを実感することさえできないかもしれません。そのため、村へ戻ってから1～2週間ほど経った落ち着いた頃に訪問して初めて、ご家族の状況を確認することができます。

また、院内で働くスタッフも同様です。日々様々な状況に対応し、命を守るためにベストを尽くしていますが、どんなに努力しても、時には命を守れない場面に出会うことがあります。そのつらい気持ちを抱えたまま悲しむ家族へのケアをすることには、計り知れないストレスがかかるのです。死亡後の家族の様子を報告することは、ケアにあたったスタッフにとっても、行き場のなかった気持ちを消化させることにつながるのだと実感しました。

- 年間訪問件数:454件、1年間の総走行距離:25,405km（ルアンパバーンとロンドン往復の距離に相当します）
- 栄養失調、脳性麻痺、HIV感染症、また、社会的な問題を抱えた患者さん、死亡後の家族のために訪問看護を行いました。
- 障がい児クリニックとの連携を強化し、アウトリーチスタッフが理学療法士による脳性麻痺患者の家族指導についてのレクチャーを受けました。
- 障がい児クリニックとの協力のもと、ダウン症患者家族へのサポートミーティングを初めて開催し、11組の家族が集まりました。

Aちゃんの症例

死亡後の患者さん宅訪問をスタッフに提案した時、「もう亡くなっているのに、どうして?」という反応でした。しかし次第に、一緒にいた兄弟やご両親の心配顔など、気がかりだったことが思い出された様子。それを機に、死亡後の訪問がスタートしました。

感染症で入院し、急変により院内で死亡したAちゃん。突然の出来事に、ご家族はもちろん、対応したスタッフも精神的ストレスが大きかった症例でした。ご家族を訪問したのは、死亡してから2週間後のことです。お葬式を終えてひと段落した頃でしたが、ご両親はAちゃんのことが頭から離れないと言います。あまり多くを語りたがらないご両親も、スタッフが聞き役に徹しているうち、少しずつ言葉を紡ぎ始めました。薬について質問をしたかったけどできなかったということや、病院で不思議に思っていたこと、本当はこうしてほしかったということなどなど。全部吐き出してもらった後には、こちらからできるアドバイスを伝えました。Aちゃんにばかりご両親の気持ちが行ってしまいがちで、兄弟姉妹への十分な目が届きにくくなるため、6つ上のAちゃんのお姉ちゃんへの気遣いも心がけてほしい、と。

訪問後、スタッフからは「訪問してよかった」との声が。ご家族の本音を聞き悲しみや思い出を共有することで、今後の対応へのヒントを得たばかりか、自分たちも少しホッとすることができたのだと言います。Aちゃんをきっかけに、今では死亡後の訪問は当たり前になっており、遠方で訪問できない場合には、電話でのフォローアップも行うようになりました。

スタッフ紹介

私たちが ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）で働いています!

●私の名前は**Sengdeuane（センデゥアン）**です。ラーと呼んでください。ここで**理学療法士**として働き始めて4年3ヶ月になります。運動機能の回復や発達障害のある患者さんのサポートを行っています。ラオスには小児病院が2つしかありません。2008年に理学療法士の資格をとったのですが、働ける場所がなく、私が学んだことを活かせるチャンスをくれたのがLFHCでした。はじめは英語が難しく苦労しましたが、約2年間、理学療法士のボランティアさんがとてもたくさんの事を親身になって教えてくださり、私の知識は毎日広がっていきました。そして今、私は自信を持つことができていますし、もっと学びたいと思っています。

●**麻酔専門看護師**の**KueLee（クーリー）**です。手術中にアクシデントが起こった時、適切に対応しなければなりません。患者さんの笑顔のために最善を尽くしています。病院では、機器や医薬品等に大きな費用がかかります。皆さんからのご支援にとても助けられていると実感しています。

●私は**Vandee Xiong（ヴァンディ ション）**、29歳です。4年前から**手術室看護師**として働いていています。ずっと公立の病院で働きたいという夢がありましたが、LFHCではすべての患者さんに無料で医療を提供すると聞き、とても興味を持ちました。無償の病院なんて見たことも聞いたこともなかったので。LFHCが無償なのは、多くの人の支援があるからだと学びました。ご支援をありがとうございます。

●私は**Nang（ナン）**です。LFHCで働き始めて2年が経ちました。患者さんの**受付**を担当しています。子供が大好きだし、子供たちを助ける素晴らしいプロジェクトに参加できて、とても嬉しいです。

●私の名前は**Sakhone Visaylut（サコン ヴィサイルック）**です。コンと呼んでください。LFHCで**検査技師**として働き始めて1年が経ちました。たくさんの異なる国の人たちと一緒に働けること、彼らから新しい知識を学べることがとても嬉しいです。今、検査科に新しい検査機械が入り、使い方を勉強しています。

●私は**Keo Sysaythong（ケオ シサイトング）**、49歳の**看護師**です。以前は、同じ敷地にあるルアンパバーン県立病院で働いていました。その時、貧しい家庭の患者さんたちを最後まで助けきれないジレンマを抱えていたので、ルアンパバーンで新しくNGOのプロジェクトが始まると聞き、その一員になりたいと思いました。私はLFHC開院当初から関わっています。Compassionate care（思いやりのあるケア）を提供し、患者さんが回復する。食べ物を買うお金がない、家に帰る交通費がない、といった状況の時は病院がそれらを負担しサポートする。最後まで支えることが、患者さんや家族の笑顔に繋がり、私も嬉しくなる。この幸せは、Compassionate careを提供できているからこそ起こりうることなのです。

●**Ham（ハム）**です。外来で**看護師**として働き始めて約5年。以前は別の病院で勤務していましたが、LFHCの職場環境が気に入っています。

●**Amphone　Mounmingkham（アンポン ムンミンカム）**です。5年前から**看護師**として働いています。子供が大好きで、LFHCで働けていることを幸せに思います。

●**栄養士**の**Payao（パヤオ）**です。ここで働き始めて1年、チームの一員として、外国人スタッフのみんなと一緒に働けることが嬉しいです。

●私は**Kayang（カヴァン）**、LFHCで働いて3年になります。**医師**として治療にあたり、また、技術を磨くための研修を受けながら過ごしています。救急、入院病棟、外来、サラセミアクリニックと、様々な部署で、医療用語を英語で学びつつ、海外ボランティアのみんなと一緒に経験を積めることが嬉しいです。LFHCは質の高い医療を無償で提供しており、それがラオスのためにとてもいい。でも最もよいところは、どんな患者さんであっても常に誠実に、尊敬の心をもって治療を行うことです。

●私は**Singkham Saykhamhueang（シンカム サイカムアング）**、**検査技師**として2016年から働いています。LFHCは、スタッフがみんなフレンドリーで親切です。毎週英語のクラスがあって、毎日、外国人ボランティアさんと英語で話す機会もあります。昨年は、タイで開催されたトレーニングに参加する機会がありました。これからもっと、自分の技術や英語力を上げていきたいです。

●**Syviengxam（シヴィエングサム）**といいます。チュと呼んでください。5年前からLFHCの外来で**看護師**をしています。患者さんの中には「大きくなったらお医者さんや看護師さんになりたい」と夢を持ってくれる子もいるんですよ。ラオスの子供たちの未来のためにご支援をいただき、ありがとうございます。

●私の名前は**Tou Xiong（トゥ ション）**、LFHCで**医師**として働き始めて2年になります。難しい症例にぶつかった時、患者さんの家族やLFHCのチーム、県立病院のチームと、共にタッグを組んで働けるのがとても心強いです。LFHCは、医療の他に食事や交通費、フォローアップに必要な費用を含めてサポートを行う素晴らしい病院です。子供たちに本やおもちゃ、文房具等を提供できるのもいいことだと思います。

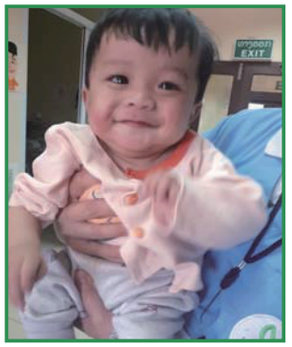
●私は**Ton（トン）**、LFHCに勤務して5年です。備品などの**在庫管理**を担当しています。物資を受け取り、それぞれの部署に届ける仕事です。この仕事は、スタッフが適切な医療を提供するために、必要な医薬品を確実かつ十分に届ける重要な役割で、誇りを持って働いています。

●私の名前は**Siamphone（シアンポン）**です。レアと呼んでください。LFHCで**看護師**として働き始めて5年です。入院病棟で患者さんの治療を行うかたわら、シフトリーダーとして、後輩看護師のサポートも担当しています。

ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)の患者さんストーリー

症 例 紹 介

Bちゃんの症例



生後まもなく呼吸困難を引き起こしてしまい、LFHCに救急搬送されたBちゃんのお話です。

Bちゃんの肺にはたくさんの胸水が溜まっていることがわかり、100ccもの胸水を吸引しなければなりませんでした。適切な処置が施されたことで、呼吸状態はすぐに回復。ところが、その後再び胸水が増加してしまいます。さらに、授乳を始めると、その胸水に粘着性が出現してきました。

この状況を専門家に打診したところ、“乳び胸”という命をも脅かす稀な疾患が推測されるとの診断。この病気は脂肪分の摂取を避けなければならないのですが、一般的な赤ちゃんのミルクには脂肪が含まれています。 急ぎ、“MCTフォーミュラ”という、脂肪分を含まない特別なミルクが必要になりました。しかし、一般的なミルクではないためラオスで入手するのは困難で、かつ高価です。どうにかできないものかと考えた結果、苦肉の策として、母乳を血液検査の機械を使って撹拌し、脂肪分を取り除く方法にたどり着きました。

応急処置的にはうまくいきましたが、撹拌された母乳の栄養分がBちゃんの成長に十分なのか不安が残ります。また、Bちゃんの成長に伴いミルクの摂取量が増えていく中、撹拌を続けることは現実的な策でもありません。この状況を打破するためには、MCTフォーミュラの入手が必須であることは明白でした。

この任務を請け負ったのは、LFHCアウトリーチ部門です。結果、MCTフォーミュラを寄贈してくださる支援者に出会うことができました。そのおかげで、Bちゃんは無事に退院。2週間に1度の通院で経過観察を行うことになりました。この通院は現在も継続中で、Bちゃんは元気に成長しており、離乳食も始まっています。このまま健やかに育ってくれることを祈るばかりです。

Cちゃんの症例

2018年の夏、ラオスでは日本脳炎が大流行しました。LFHCでも、入院病棟の半分近くが日本脳炎の患者さん、もしくはその疑いがある患者さん、という状態。しかも、この状態は思った以上に長期化しました。

日本脳炎を発症すると、高熱・頭痛・嘔吐・下痢・意識障害・けいれん等の症状が現れ、それが数日間続きます。現れる症状も、軽症・重症の程度も様々で、すっかり良くなる子がいる一方、重篤な場合は障がいが残ることもあります。障がいの出方もまた様々。体のどこかが麻痺するケース、意識障がいにつながるケース等々、一筋縄ではいかない感染症といえましょう。

Cちゃん(写真右)にも、重度の障がいが残ってしまいました。時々、不穏状態になり、大暴れすることがあります。そのたびに、お母さんがCちゃんを抱きかかえていました。小さな子供とはいえ、“赤ちゃん”や“幼児”の域を超えたCちゃんなので、その子を抱えるお母さんはとても大変です。また、Cちゃんは食べ物を飲み込むこともできなくなったために、栄養の摂取は鼻からの管を使っています。退院を迎えることにはなりましたが、お母さんはじめご家族のストレスがかなり大きいことは想像に難くありません。LFHCでは、Cちゃん退院後、家庭での管の管理や不穏状態の管理など、継続的な支援が必要と判断。アウトリーチスタッフが毎週、家に電話して状況確認をするとともに、ご両親を励まし続けました。

退院から数ヶ月。Cちゃんの具合が徐々に落ち着いてきたと聞き訪問看護を予定していたところ、Cちゃんとご家族が突然の来院。Cちゃんは、入院中に見せていた苦悶の表情が全くなく、とても元気そうにしています。ご家族も揃ってお元気でした。これは、辛抱強い治療とホリスティック(全人的)な継続ケアが実を結んだ症例だと思っています。

アンコール小児病院への支援

カンボジア

アンコール小児病院(AHC)は1999年に当団体が設立、運営していましたが、当初の予定通り現地化を果たし、2013年からはカンボジア人による運営となりました。現地化後も私たちは、助成事業として、AHCの教育プロジェクトと地域保健医療プロジェクトに支援を続けています。

AHCスタッフへの教育

- ◉継続的な医療教育:上半期35セッション、のべ1,098名参加、下半期32セッション、のべ1,031名参加。
- ◉ワークショップ:5回、のべ535名参加。
- ◉トレーニング:上半期のべ733名、下半期のべ148名参加。
- ◉継続的な看護教育:上半期20セッション、のべ375名参加、下半期29セッション、のべ526名参加。
- ◉オーストラリア、中国、スペイン、タイ、アメリカ等で行われた各国際会議に、のべ48名のスタッフが参加。
- ◉カンボジア国内での会議に、のべ124名のスタッフが参加。

院外の医療従事者への教育

- ◉AHC主催の第3回子供の健康管理会議を開催しました。
- ◉看護師の知識や技術向上を目的とした小児ライフサポート研修を2回開催しました。
- ◉上半期10名、下半期2名の研修医が小児科医の試験に合格し、AHCでの研修プログラムを終えました。
- ◉カンボジアのポーサット、パイリン、モンドルキリ、シェムリアップからの医師に対する1年間の小児フェローシップ研修を行いました。
- ◉24名のヘルスワーカーに基本的な新生児ケア、救急ケア、看護などについて研修を実施しました。
- ◉小児疾患総合管理(IMCI)についての研修を29名の保健専門家に実施しました。
- ◉指導力を高めるための研修を実施し、18名の医師や薬剤師、検査技師が参加しました。
- ◉国内の教育機関でAHCスタッフによる研修を実施しました。
- ◉のべ704名の学生インターンシップを受け入れました。

院外での健康教育(地域保健医療活動)

- ◉カンボジア国内の教育機関や医療施設と協力した医療教育活動を実施。家族や子供たち、のべ14,186名に健康教育を実施しました。
- ◉医療(Treatment)教育(Education)予防(Prevention)の活動用トラック=通称TEPトラックを活用し、小学校28校を訪問。口腔衛生教育の他、基本的な健康教育、WASH(水と衛生)教育、イベントを通したヘルスプロモーション等に取り組みました。
- ◉学校で子供たちに栄養や衛生概念、健康に関することを楽しく学ぶ機会として企画された“Happy Child Day”のイベントに協力しました。

外来患者総数	:119,203人
入院患者数	:3,960人
救急外来患者数	:16,285人
集中治療室患者数	:1,343人
眼科患者数	:15,034人
歯科患者数	:37,335人

※のべ人数

アンコール小児病院が 20 周年を迎えました

1999年に開院したAHCの20周年記念式典が執り行われました。会場となったAHCの待合室は、患者さんでごった返す普段とは違い、各国からお祝いに駆けつた方々でいっぱいです。カンボジア保健省・外務省の大臣、シェムリアップ保健局長、当団体理事の皆さま、ボランティア経験者などなど、日本からは80名ほどが参列。AHCの勤続20年スタッフの表彰も行われ、あたたかく感動的な式典となりました。

ラオ・フレンズ小児病院

赤尾和美 Kazumi Akao 看護師の 今月の出来事から

5月▶8月 チアミン欠乏症長期リサーチプロジェクト

ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）院内で、チアミン欠乏症（ビタミンB1欠乏症　BeriBeri）の長期リサーチプロジェクトが行われています。このチームはビエンチャンからの来院で、医師、看護師、検査技師、薬剤師を含む総勢16名で構成され、おそろいのピンクのシャツがチームの目印です。LFHCには、栄養障害を抱える患者さんがたくさん来ています。栄養障害と一言で言っても、栄養素全般の不足によるもの、たんぱく質の欠乏によるものなど、症状は様々。ビタミンB1欠乏症であるBeriBeriも、そのひとつです。以前からこの紙面でも話題に上げているBeriBeriは、LFHCでも多く見受けられ、命をも脅かす疾患です。このリサーチでは、2019年4月～2020年4月までの1年間にLFHCへBeriBeriで来院した患者さんを対象に、たくさんの情報を集めて分析することになっています。BeriBeriの患者さんは来院数も多く、治療も適切にできるようになってきていますが、実際のところは、解明されていないこともまだたくさんあります。リサーチでは、血液、超音波、インタビューにより情報が集められ、身体的変化ばかりではなく、生活、習慣、環境、健康に関する認識や行動など、調査項目が多方面にわたって網羅されていますから、今回のプロジェクトでよりたくさんのことが解明され、今後のBeriBeriの予防や治療改善につながるのではないかと期待が高まります。また、栄養に関する医療体制の整備に国レベルで取り組み始めたことも明るいニュースです。今回の結果により、何かヒントを提供できるようになるのではないかと思っています。

お揃いのピンクのシャツ

超音波検査で心臓をチェック中

5月▶8月 カットボランティア

カンボジア当時から恒例となっているヘアーカットボランティアの皆さんが今年も参上！ すごいです、ほんとに毎年19年間、多少のメンバー交代はありながらも必ず来てくださって、たくさんの子供たちと家族を笑顔にしてくれます。炎天下ですがとにかく切りまくり、3日で3つの村へ行き、400人以上のカットをしてくださいました。村人の皆さんから「また来年も来てください！」と声がかかり、来年の予約を取り付ける人もいて大歓迎です。言葉なしでも通じ合えるって本当にうらやましいです。

青空美容院open

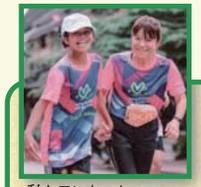
9月▶10月 翻訳絵本

ファンドレイジングや支援方法には色々な形があり、支援者の方々からは、それぞれ違う形でご協力いただいています。右の写真もその一例です。支援を思いついた方が、関係各所に呼びかけ、日本の絵本をラオス語に翻訳して送ってくださったのです。さっそく入院中の子供たちに渡し、笑顔をパチリ。みんな大喜びでした。

子どもの笑顔、最高ですね！
もっと笑顔を作りたいですね～

9月▶10月 チャリティマラソン

今年で7回目を迎えたルアンパバーン・チャリティハーフマラソンですが、毎回参加ランナーの数が増え、今年は40ヵ国から1,800名を超える方々がエントリーしました。1回目は400名そこそこのこじんまりとした大会でしたので、ずいぶんと大きくなったものです。参加費の一部を支援としていただいています。チャリティ分が入るために少々お高い参加費ではありますが、皆さんのご協力に感謝いたします。このマラソンイベントでお友達になった方も年々増え、そういった方々が毎年戻ってきてくださることが、とても嬉しいです。実は私は、LFHCができる前の1回目から参加していて、この数年は患者さんと一緒に走っています。今年はモンちゃん。LFHCに入院していた1年前は歩くことも座ることもできない状態でしたが、ミラクルな回復で、今年は一緒に走れるほどになりました。まだ少々麻痺は残りますが、7キロを私と一緒にボチボチと頑張りました。どのイベントも準備がとても大変です。このマラソンの準備はいろんなハプニングが起こりやすく、毎年ハラハラですが、今年は特に大きな問題もなく、参加いただいたランナーの皆さんにも喜んでいただけたのではないかと思います。


私とモンちゃん

ランナーとして参加したスタッフも
達成感でいっぱいです！

9月▶10月 エンターテイナーのほっほさん

こんな形でご支援をくださった方もいらっしゃいます。
エンターテイナーの、ほっほさん（森薗拓郎さん）。プロのパフォーマーさんです。ラオスだけでなく、国内外で多くのチャリティ活動をされており、ラオスの子供たちにもぜひ！と、わざわざコンタクトをくださいました。ほっほさんは、病院でのパフォーマンスに加え、訪問看護にも同行。村の小学校では100人を超える子供たちが待っていました。現地到着までの3時間、道が悪く…少々車酔いの状態で、さらに灼熱の炎天下でのパフォーミングとなり申し訳ない気持ちでしたが、子供たちは大盛り上がりで先生まで大興奮！また、毎日一生懸命働くスタッフにも楽しんでもらいたいと、院内各部署をピエロさんとして練り歩き、風船パフォーミングをしてくださいました。患者さんのみならず、スタッフへもお気使いいただき、とても素敵な時間をプレゼントしてくださいました。

風船で作った花束を
差し出され、はにかむ女の子

炎天下にもかかわらず、
夢中で見入る子供たち

11月▶12月 お正月

ラオスには1年に4回のお正月があります、と以前ご紹介したことがあります。12月は、少数民族の一つであるモン族のお正月です。LFHCの中にもたくさんのモン族スタッフがおり、今年はモン族スタッフが他の病院スタッフを招待し、モンニューイヤーのお祝いパーティーを開催してくれました。普段は子供の命を預かる医師や看護師も、この日はユニフォームを脱ぎ、早朝からお祝いの準備です。パーティーはお昼過ぎに始まり、伝統のモン料理、カラオケ、スピーチなどで盛り上がり、そして、一大イベントは餅つき！臼の形が平べったいですが、木製ですし、杵は日本と全く同じです。ついたお餅は女性が丸めて食べる準備をするのですが、日本の習慣にそっくりですね。文化のつながりを感じました。こうした異文化交流の機会は、他者を尊重する気持ちを養う効果があるのではないかと思います。

二人とも医師。聴診器を包丁に
変えて新年の料理を準備中です

餅つきは日本と同じ！

フレンズJAPAN 事務局の1年

2月

●はままつグローバルフェア@クリエート浜松（静岡）
●岸和田健老大学（大阪）講演／赤尾
●加久藤中学校（宮崎）講演／永野

4月

●ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）対外担当部長来日歓迎会@事務局　……
LFHCで対外担当部長として活躍しているアナベラが来日しました。病院の広報としてイベントを取り仕切ったり、外部からのお客様対応をしたり、現地で大活躍のアナベラ。私たちからの様々なリクエスト（写真や資料の提供、日本からの訪問希望者に関する確認等々）に対応してくれているのも彼女です。初めての来日で不安もあったようですが、日本の支援者さんやボランティアさんともすぐに打ち解け、短い滞在を楽しんでくれました。
●松戸さくら祭チャリティバザー（千葉）

5月

●杏林大学（東京）講義／赤尾
●フレンズ応援団ファンミーティング@事務局　……　当団体の設立は1996年。20年以上も活動していますが、団体の認知度が高いとは言えません。団体とその活動を多くの方に知ってもらうようにアイディアを持ち寄ろう、と声をあげてくださった方々がおり、定期的に情報交換会を開催してくれています。学校帰り、仕事帰りに気楽に集まれるよう、平日の夜に行っていますので、「フレンズの知名度アップは我におまかせを！」という方がいらっしゃれば、ぜひともご参加ください。「何ができるかわからないけど、とにかくフレンズを応援したい」という方も、もちろんお待ちしています。
●ラオスフェスティバル2019@代々木公園（東京）　……　2019年もラオスフェスティバルにブースを出展。猛暑日となった2日間でしたが、暑さを吹き飛ばすほど熱い方々が、たくさん立ち寄ってくださいました。東南アジアの医療に興味がある方、ラオス旅行を計画している方、国際協力イベントが好きな方、ボランティア活動に興味がある方、などなど。とても熱心な方が多く、私たちも活動紹介に力が入ります。サテライトステージには、当団体の永野も登壇。ラオスの医療事情をお伝えしました。
●AAA（Act Against AIDS）報告会／永野
●正和中学校（三重）修学旅行分散学習受け入れ@事務局
●フレンズ × JAMMINオリジナルコラボグッズ限定販売　……　JAMMINは、京都発のチャリティ専門ファッションブランド。非営利団体とコラボし、オリジナルデザインのファッショングッズを1週間限定販売しています。イベントでしか着られないものではなく、普段着にできるデザインかつ団体のイメージが伝わるデザインにすることを大切にしているとのこと。Tシャツの場合、1枚につき700円がチャリティとなり、コラボした団体に寄付されます。フレンズをイメージしたデザインには、“We are one World Family”の文字。そのまわりをたくさんの木や枝葉が囲み、フレンズの“種”が芽吹いています。とても好評をいただき、187,060円のチャリティとなりました。
●Salon VIJIN企画　古着買取寄付実施

6月

●2018年版アニュアルレポート発行
●活動報告会&発送作業ボランティア会@事務局
●フレンズ応援団ファンミーティング@事務局
●茗溪学園中学・高校（茨城）桐創祭／フレンズ活動紹介パネル資料貸し出し

7月

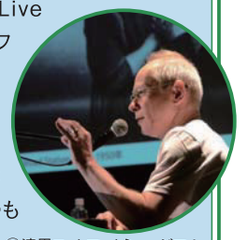
●クラウドファンディング・キックオフイベント@Nagatacho GRiD（東京）　……　クラウドファンディングにチャレンジするにあたり、（株）ガイアックス様と共催で、キックオフイベントを開催。テーマは『寄り添う障がい児ケアの未来。私たちにできること。』。杏林大学医学部付属病院患者支援センターの精神保健福祉士／加藤雅江さん、杏林大学医学部医学教育学教室講師／江頭説子さん、当団体代表／赤尾和美によるクロストーク形式のイベントです。グラフィックレコード（会議内容を可視化し、まとめる）を担当する松本智子さんも福岡から駆けつけてくださり、充実した2時間でした。
●クラウドファンディングにチャレンジ　……　『ラオスの障がい児ケアを一歩前へ！心に寄り添う人材を育てたい』を掲げ、当団体代表の赤尾和美がチャレンジ。目標金額250万円をクリアすることができました。たくさんのあたたかいご支援と応援に感謝申し上げます。
●フレンズ応援団ファンミーティング@事務局
●聖心女子大学（東京）講義／赤尾
●上田高校（長野）松尾祭／フレンズ活動紹介パネル貸し出し

8月

●活動報告会&交流会@事務局
●フレンズ応援団ファンミーティング@事務局
●ヘアカットボランティア@ルアンパバーン

9月

●ラオス・スタディツアー催行@ルアンパバーン　……
LFHCは、感染防止やプライバシー保護のために院内見学をお断りしています。しかし、このツアーでは特別に、赤尾看護師による院内ツアーと訪問看護への同行を組み込みました。また、世界遺産でもあるルアンパバーン市内の観光もセット。参加メンバーからは、好意的な感想が寄せられました。
●フレンズ応援団主催［フレンズBAR］開催@東京・カンボジア料理店アンコールワット
●琉球大学医学部（沖縄）琉大祭／活動紹介パネル貸し出し
●泉佐野泉南医師会看護専門学校（大阪）講義／赤尾
●K・MoPAチャリティ・ライブ2019@清里（山梨）
……　清里フォトアートミュージアム（K・MoPA）が開催する毎年恒例のチャリティイベントです。今回は、独自の視点と音楽観で世界の多様な音楽を紹介しているピーター・バラカンさんのLive DJ。展示中だった『ロバート・フランクの写真・アメリカ・それから』よりインスピレーションを得た曲をセレクトしたそうです。イベント収益の一部は、当団体にご寄付いただきました。いつもありがとうございます。



©清里フォトアートミュージアム

10月

●東京チャリティ・ガラディナー2019@ザ・キャピトルホテル東急（東京）
……　ホテルのディナーをお楽しみいただきながら、数々の逸品をオークション形式でお買い上げいただくチャリティイベントです。4回目の開催となった今回は、184名が参加。LFHCの入院患者さんを支援するコーナーでは、たくさんの方がご自分の番号札を掲げ、支援を表明してくださいました。心より感謝申し上げます。

12月

●発送作業ボランティア会@事務局
●上平中学校（埼玉）講演／永野
●入院治療費への寄付キャンペーン実施
●活動報告会&忘年会@メディカルホットライン（株）アーステラス（東京）　……　1年の活動を振り返る活動報告会と、1年の感謝を込めた忘年会を開催。たくさんの方にご参加いただきました。LFHCでボランティアしてくださったパフォーマーのほっほさんも登場！間近で見ても全くタネがわからない手品に、一同大興奮でした。また、開催にあたっては、会場提供、準備など、三光ソフラングループ・メディカルホットライン（株）様にたいへんお世話になりました。師走の忙しい時期、どうもありがとうございました。

How to Support

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPANの活動は、皆さまのご支援により支えられています。

支援方法をお選びいただけます

◉正会員
年会費　個人12,000円
　　団体・法人30,000円
（年度ごとに更新・活動への議決権あり
・入会申込書あり）

◉賛助会員
年会費6,000円（支払日より1年間）

◉学生賛助会員
年会費3,000円（支払日より1年間）

◉マンスリーサポーター
500円から自由に金額指定
（毎月、指定口座より引き落とし）

◉一般寄付（金額・回数自由）

※ご寄付には税制の優遇措置が可能な領収証を発行します。

※銀行振込や、インターネットからのカード決済も可能です。

皆さまの支援でこんなことができます

500円	医師や看護師用の使い捨て手術着1着
1,000円	粉ミルク2週間分
3,000円	一人の患者さんの首都ビエンチャンへの往復交通費
5,000円	一人の手術1回分の麻酔薬
10,000円	一人の患者さんの2日分の入院費
30,000円	院内薬局の運営費（薬代+スタッフ人件費）1日分

※1ドル＝120円の場合

マンスリーサポーターって何?

マンスリーサポーターになると、決まった金額が、毎月ご指定の口座から、自動的に引き落とされます。「継続的に支援したい」「小さな金額で負担なく、コツコツと支援したい」「年会費の振り込みを忘れがち」といった支援者さんからの声にお応えし、誕生しました。500円以上で、お好きな金額をご指定いただけます。

マンスリーサポーターになるためには、専用申込書の提出が必要です。リーフレットに【マンスリーサポーター申込書】が付いていますので、ご利用ください。詳細は当団体までお問い合わせください。

こんな支援方法もあります

◉寄付型飲料自販機の設置

自動販売機でドリンクを買うと、その代金の一部が自動的にフレンズへの寄付に充てられます。これはコカ・コーラ ボトラーズジャパン（株）が社会貢献活動として行っているもので、利益の一部が支援団体への寄付金となるシステムです。

この寄付型自動販売機を設置してくださるお店や会社を募集しています。自販機設置によるご負担は、月1,000～1,500円程の電気代のみです。すでにいくつかの企業様や団体様が設置してくださいました。オリジナルデザインの支援型自販機が、日本各地に広がることを期待しています。

◉募金箱を設置

当団体の募金箱を置いてくださるお店や会社、施設などを募集中です。現在、47都道府県中23都府県で、美容院やレストラン、パン屋さん、病院、企業の受付カウンターなど100カ所以上に設置されています。イベントへの貸し出しも行っていますので、お気軽にお問い合わせください。ご協力をお願いいたします。

◉本やCD/DVD（新品・中古不問）を「ありがとうブック」に送付

家で眠っている本やCD、DVD、ゲームソフトを合わせて30点以上、宅急便の着払いで［ありがとうブック］に送ると、買取代金が当団体に寄付されます。ご協力をお願いします。

問い合わせ先 https://www.39book.jp/

◉グラフィックデザインなどの技能や専門知識を提供

チラシやDMのデザインを担当してくださるボランティアを募集しています。他にも、専門的な技能や知識を活かしたボランティアをしてみたい方、どんどんお声がけください。

フレンズ関連書籍のご案内

赤尾和美著
**「この小さな笑顔のために
～日本人ナースのカンボジア奮闘日記～」**
¥1,540（税込）

現在はラオ・フレンズ小児病院で活動する赤尾看護師が、アンコール小児病院時代に執筆した奮闘記。東南アジアにおける医療現場の臨場感だけでなく、カンボジアの人々の暮らしを眺めるような、紀行的味わいも感じることができる名著です。

宮本敬文写真集
「GIFT to children of Angkor」
¥2,750（税込）

雑誌や広告写真で注目され多くの有名人を撮影して作品を残し、周囲に慕われながらも夭折した宮本氏。生前、アンコール小児病院の活動に共感し、何度もカンボジアに足を運んで撮影した渾身の写真集です。

※これらの書籍は現在、書店等での取り扱いはございません。
ご購入希望の方は、フレンズ事務局までお問い合わせください。

世界子供白書 2017 より抜粋	日　本	ラオス	カンボジア	ミャンマー
新生児死亡率	1	29	16	25
5歳児未満死亡率	3	64	31	51
妊産婦死亡率	5	197	161	178
改善された飲用水源を利用している割合	99	80	75	68
適切なトイレ設備を利用している割合	100	73	49	65
平 均 寿 命	84	67	69	67

※新生児及び 5 歳児未満死亡率は、出生 1,000 人あたりの死亡人数。
※妊産婦死亡率は、出生 10 万人あたりの死亡人数。
　また記載の値は、2015 年国連機関妊産婦死亡推計値を参照したもの。
※その他項目の単位は%。

2019年度　活動計算書

2019年1月1日～12月31日
特定非営利活動法人　フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN

（単位:円）

科　　目	金　　額		
Ⅰ　経常収益			
1　受取会費			
正会員受取会費	684,000	684,000	
2　受取寄付金			
受取寄付金	121,153,481	123,153,481	
3　助成金収入			
助成金収入	1,993,659	1,993,659	
4　事業収益			
普及活動収入	272,707		
収益事業収入	6,217,468	6,490,175	
5　その他収益			
受取　利息	6,725		
為替　差益	423,485		
雑　収　入	4,526	434,736	
経常収益　計			132,756,051
Ⅱ　経常費用			
1　事業費			
（人件費）			
給料　手当	4,833,549		
法定福利費	1,710,569		
人件費計	6,544,118		
（その他経費）			
支払寄付金			
助成事業	31,202,626		
医療施設運営・教育・予防事業	41,457,658		
賃　借　料	1,479,072		
水道光熱費	143,804		
通信運搬費	199,665		
広告宣伝費	1,123,812		
旅費交通費	782,465		
消耗品　費	310,559		
印刷製本費	2,650		
支払報酬	600,000		
研　修　費	107,660		
福利厚生費	203,637		
保　険　料	252,310		
諸　会　費	40,800		
会　議　費	2,000		
支払手数料	749,600		
雑　　費	90,368		
イベント経費	1,263,680		
為替差損	321,644		
【売上原価】			
期首棚卸高	464,655		
期首商品・製品棚卸高　計	464,655		
仕　入　高	△ 5,155		
当期仕入高　計	△ 5,155		
期末棚卸高	△ 455,310		
期末商品・製品棚卸高　計	△ 455,310		
売上原価　計	4,190		
その他経費計	91,338,200		
事業費　計		105,882,318	
2　管理費			
（人件費）			
給料　手当	3,694,217		
法定福利費	422,056		
人件費計	4,116,273		
（その他経費）			
賃　借　料	633,888		
水道光熱費	125,174		
通信運搬費	97,958		
旅費交通費	265,934		
消耗品　費	255,693		
支払手数料	514,512		
支払報酬	518,400		
福利厚生費	185,484		
会　議　費	5,947		
雑　　費	13,919		
交　際　費	57,320		
修　繕　費	32,856		
その他経費計	4,707,085		
管理費　計		4,823,358	
経常費用　計			110,705,676
当期経常増減額			22,050,375
Ⅲ　経常外収益			
経常外収益　計			0
Ⅳ　経常外費用			
経常外費用　計			0
税引前当期正味財産増減額			22,050,375
法人税、住民税及び事業税			803,200
当期正味財産増減額			21,247,175
前期繰越正味財産額			23,914,614
次期繰越正味財産額			45,161,789

2019年度役員

代　表
赤尾　和美（看護師）

副 代 表
井津　建郎（写真家）

理　事
戴　波留美
高橋　大輔
（三光ソフランホールディングス（株）取締役
メディカルホットライン（株）代表取締役）
竹地　春海（中山身語正宗大本山瀧光徳寺）
中小路　太志
堀　成美
（国立国際医療研究センター 国際診療部　特任研究員）
松島　彰雄（前代表）
渡辺　淳子

監　事
熊井　昌広（会社執行役員）

2019年度正会員

和泉　直子	高橋　俊晴
一乗　朋美	太刀川　雅子
大角　雄三	（株）ナース・ステーション
大塚　洋子	猶原　祥光
（株）岡興産	（医）中野こどもクリニック
小川　直美	新見　香
小川　弥生	則包　哲
小澤　誠	パイン（株）
加藤　美里	橋本　朋子
兼子　思	平岩　町子
熊井　貴美	廣瀬　佳正
熊井　昌広	藤井　立秀
（株）熊谷組	藤井　哲夫
小山　達雄	松島　彰雄
笹井　良太	松原　めぐみ
（株）シャイン・コーポレーション	真弓　バラカン
（医）誠光会ひかりクリニック	水谷　祐子
加藤　嘉哉	メディカルホットライン（株）
関岡　俊二	（医）めときこどもクリニック
（宗）泰宗寺	山田　秀一
大松　誠二	渡邊　信子

東京チャリティ・ガラディナー2019 スポンサー

ΔDM
AMANTAKA
ĀMAN TOKYO
HÔTEL de PARIS MONTE-CARLO
AMANYANGYUN 养云安曼
LE BRISTOL PARIS
Royal beauty clinic
三光ソフランホールディングス株式会社

FRIENDS WITHOUT A BORDER
（認定）特定非営利活動法人
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町16-8 共同ビル7F
TEL/FAX:03-6661-7558　friends@fwab.jp　www.fwab.jp

Photo credits / Adri Berger　AHC　Shigemi Iyota